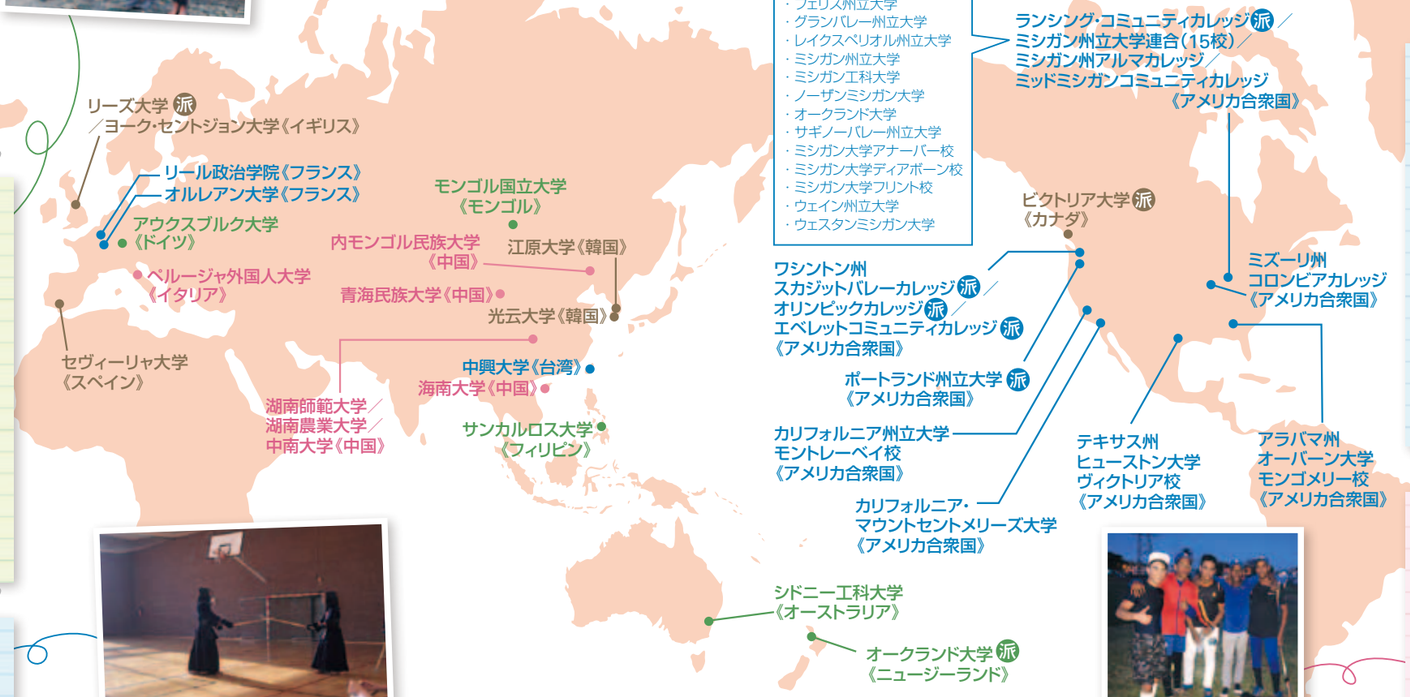
留学体験レポート

先輩たちの体験談集

受験生のみなさんはそれぞれに大学に入ってからこんなことしてみたいという願望や、また何ができるのかという疑問を抱いているかと思います。本学科では留学という一つの選択肢が用意されています。留学といっても行き先によって事情が異なります。そこで、留学について少しでも具体的なイメージをもってもらえるように、みなさんの先輩となる人たちの留学体験談を紹介します。

留学は他国の言語や文化を学ぶことができるだけではなく、自分や自国の文化としっかり向き合える貴重な機会を提供してくれます。そのため国際コミュニケーション学科では2回生の後期から留学をすることを推奨しています。期間は長期留学（9〜12ヵ月）・中期留学（3〜6ヵ月）・短期語学研修（3〜8週間）があり、英語圏だけでなく、ドイツ、フランス、中国、韓国、モンゴルなど履修した外国語科目に合わせて留学先を選ぶことができます。また協定校以外への認定留学制度もありますので、ぜひ自分に適した留学先を見つけて異文化を体験してみてください。



GERMANY

念願のドイツ留学

私はドイツのアウクスブルク大学に半年間留学しました。アウクスブルクは、ミュンヘンから電車で1時間ほどのドイツの南西部に位置する古い歴史をもつ街です。アウクスブルク大学は県大より規模が大きく、世界各国から多くの留学生がやってきます。日常生活では留学生同士でドイツ語を話していたため、8割はドイツ語を、2割は英語を使用していました。しかし日常生活とは異なり、中級レベルのドイツ語の授業では、英語と辞書を使うことが禁止されていて、思った以上に過酷な環境でした。留学生仲間で支えあい、高度なカリキュラムを乗り越えることができました。12月は町中がクリスマス仕様になり、幅広い世代の方が楽しんでいました。たくさんのおいしい食べ物が味わえるクリスマスマーケットが大好きになり、週に何度も通っていました。他の都市のクリスマスマーケットも訪れましたが、本当に地域色豊かでした。

当初1年間の留学を予定していたにもかかわらず、新型コロナウイルスの影響で半年早く帰国することになり、挑戦したいことはまだたくさんありましたが、やれることには最善を尽くしましたので、高校生のときより念願だった留学生活を体験できて後悔はありません。

中村 百花 さん ● 4回生 ● 交換留学

FRANCE

剣道は世界をつなぐ

私が留学したのは、フランス北部の玄関口であるリールという街にあるリール政治学院(Sciences po Lille)です。基本的に留学生用のコースを選択していましたが、まわりはフランス語を流暢に操る留学生ばかりでフランス語で行われるコースでは特に食らいつくことに必死でした。留学生同士の会話は基本的に英語だったため、フランス語を話す機会をもっと増やしたいと考えて、特技を活かして現地の剣道クラブに入会しました。ほとんどフランス人で、最初は話についていけませんでしたが、剣道を通して、「今日の稽古はどうだった?」という話題から始まり、拙いフランス語を駆使しながら、少しずつみんなと親しくなりました。その中でも忘れられないのは仲良くなったメンバーとチームを組み、大会に出場したことです。メンバーとの話し合いは相変わらず聞き取ることだけで精一杯でしたが、たどたどしいながらも、自分の意見を伝えられるようになれるまで成長できました。この剣道を通して得た経験から、「とりあえずやってみよう、何とかなる!」という気概をもつことができるようになり、それが今も支えてくれています。

奥田 侑姫 さん ● 2020年度卒業 ● 交換留学

MALTA

世界を知れば日本のことも見えてくる

マルタ共和国は地中海に浮かぶ小さな島国です。私はそのマルタの中では規模の大きいECマルタ校に10ヶ月間の留学をしました。世界各国の留学生が在籍し、ヨーロッパを初めとしてアフリカや南アメリカなど、普段日本で生活しているだけでは触れ合う機会のない国から来ている人ばかりでした。そのような人たちと自国のことついて話す機会がよくありました。授業でもそのようなテーマに触れることがあり、特に政治や歴史に関しては日本では経験したことがないほど盛んに議論がなされました。その際、私はクラスメイトが話している話題についていけず、日本の事情を聞かれても何も答えることができないこともありました。世界のことだけでなく、自国に関してもあまり知識をもち合わせていなかったことを思い知らされる出来事でした。しかし、それは同時に世界から見た日本、世界から見た自分について考える契機となりました。この経験は現地でないと得られなかったことであり、留学生活で得た最も大きな財産だといえます。

立花 康太 さん ● 2020年度卒業 ● 認定留学

SOUTH KOREA

韓国から世界を学ぶ

留学先の光云大学は中国やベトナムなどからの留学生も多いことから、現地の友人だけでなく、様々な国籍の友人ができました。友人達とは放課後一緒に食事をしたり、休日はよくカフェで言語の壁を感じない程に話し込んだりしていましたので、韓国語は自然と身に付きました。光云大学は日本人留学生が少なく、現地の生活を体験し、韓国語を習得するには恵まれた環境といえます。

また週に2回、大学の日本語授業のサポートを行っていました。多くのネイティブスピーカーの前で韓国語を駆使し、日本の文化について話すことは思っていたよりも大変で、そもそもの価値観の違いや言語的なニュアンスの違いで上手く伝わらないこともありました。しかし現地の友達と授業外でも交流していく中で、日本の何に興味があるのか段々と分かるようになりました。学生が私の授業を受けて日本に留学したいと言ってくれたときは本当に嬉しかったです。韓国で多様な価値観に触れて、自分の中の「あたりまえ」を見直すことができました。

田中 美有 さん ● 4回生 ● 交換留学

TAIWAN

目標に縛られる必要なし

私は留学前には、「中国語がうまくなりたい」、「たくさんの友達を作りたい」と漠然と考えていただけで、特に大きな目標をもっていたわけではありませんでした。そのため、自信がもてず、悩むことも多かったように思います。しかし、実際に留学先の中興大学や寮で様々な国籍の人と出会って異なる価値観に接して不安は払拭されました。量子物理学者で無神論者のスリランカ人や、敬虔なイスラム教徒であり、王族の末裔だったインドネシア人などとルームメイトになり、台湾人の友人とは毎日のように一緒に食事をとったり、家に招待されて彼の家族の誕生日を祝ったりして、まるで家族の一員のように接してもらいました。その厚意に応えようと自分も少しずつ変わりました。台湾の人たちの面倒見のよさや友情を大切にする文化に救われたといえます。留学生活はよい意味で予想から大きく外れ、偶然の連続でした。目標がすぐに見つからないとしても、まずは自分の直感を信じて挑戦することもときには必要だと思います。

山本 正太郎 さん ● 4回生 ● 交換留学

USA

自ら声をあげる大切さ

私が留学していたアルマカレッジは滋賀県の姉妹州であるミシガン州にあります。アメリカの中でも北の方に位置しており、冬は−20℃を下回ることも珍しくありません。留学生が少ないことから留学生用の語学の授業はなく、最初から現地の学生と同じ授業に飛び込むことになります。自分の興味のある授業を自由に履修でき、私はジェンダー学や経済学、心理学などの授業を選択しました。始めのうちは授業のほとんどが理解できず、膨大な量の課題に圧倒され、不安でいっぱいになりましたが、親身な先生方や周りの友達にサポートしてもらいながら次第に授業に慣れていくことができました。アメリカでは留学生だからといって特別扱いされることはなく、黙っていては誰も助けてくれません。そのため、自分から積極的に質問をしたり、声をあげて助けを求めたり、分からないということを正直に伝えることが重要になります。最初から現地の学生と同じ授業に飛び込むことは簡単ではありませんでしたが、振り返ってみると自分自身が成長するための良い機会だったと思います。

大橋 美咲 さん ● 4回生 ● 交換留学

CUBA

非日常の日常を生きる

私は、キューバのハバナ大学に一年間留学していました。2回生の夏に一人旅した時に見た、そこに住む人達の「生」に対する姿勢に魅了され、留学を決意しました。目的は、現地の住民の目線で彼らの人生を捉えることでした。キューバでは物資不足が続き、特に新型コロナウイルス感染拡大以降ハードとなり、お肉を買うのに朝5時起きで夕方まで並ぶことはざらでした。まさに非日常が日常でした。しかし、日本ではもうほとんど見かけることがなくなった住民の連帯がそこにはありました。モノがなければ近所の人がお裾分けをする、そんな『男はつらいよ』という映画で描かれていたような社会です。日本は世界的に「快適·便利·安心」な国ですが、閉塞感を抱いている人が少なくないことからも、3つの要素は必ずしも「幸せ」には繋がりません。闇があるから光の輝きが美しいように、非日常の営みに垣間見られる幸せは言葉では表せない体験です。将来役に立つから留学しようという考えは捨てて、皆さんの心を鷲づかみにする何かを求めて学生生活を送ってほしいです。

初田 親 さん ● 4回生 ● 認定留学（トビタテ!留学JAPAN）

AUSTRALIA

できないことから何事も始まる

私は、本校の交換留学と文科省の「トビタテ!留学JAPAN」を併用し、オーストラリアのシドニー工科大学に留学しました。授業はもちろん、学外でも積極的に活動しました。最も印象に残っているのは、シドニー地区の社会人バレーボール大会で優勝したことです。多様な年齢層やバックグラウンドの仲間と一丸となった、思い出深い経験です。

夏季休業期間（約3か月間）は、西海岸に位置するバンバリーのドルフィンディスカバリーセンターでインターンシップに従事しました。目的は、精神疾患を患った人がイルカと触れ合い社会性の向上を目指す「イルカセラピー活動」を学ぶことです。そこで、英語の訛りという壁にぶつかりました。全く英語が聞き取れず、仕事を任せてもらえない挫折を味わいました。しかし、毎晩のシャドーイングや、他の海外インターン生の協力のおかげで1ヶ月かけてようやく慣れることができました。その後も、自閉症の子供たちとの信頼関係構築に苦労しました。けれども最終的には、警戒心から泣いていた子も、笑顔で近寄ってくるまでになりました。留学ではできないことの連続でしたが、「できないことから何事も始まる」と困難をポジティブに捉えられる力がつきました。

加納 由津子 さん ● 4回生 ● 交換留学（トビタテ！留学JAPAN）